

いま『都市のイメージ』を読む 西 村 幸 夫

日本では長い間幻の訳書となっていた本書がここに再刊されたことを愛読者のひとりとして喜びたい。英語圏ではこの本は都市計画・都市デザインの基本図書として刊行後約50年経った今でも読み継がれている。すでに執筆時からおよそ半世紀を経過して、都市を巡る状況も一変した。そんななかで本書をいまの時点で読む意味はどこにあるのか、そもそも本書の歴史的な意義はどこにあるといえるのか。

本書が刊行されるまで、都市を論じた著作のほとんどは、都市を価値ある建物や街路の意図した配置の問題として、計画者や為政者の立場から語ってきた。それを本書はまったくひっくり返して、都市の姿を、あるがままの形態とその背後にある固有のイメージだけをたよりに、そこに住む人々によって感じられるものとしてとらえようとしている。そこに本書の決定的な新しさがある。

都市をだれかが造り出すものとしてではなく、転変する変化が絶え間ないものとしてとらえ、全体から部分に下降するのではなく、部分の積み重ねの上に全体を構築しようとしている。そのときに手がかりとしているのがグループ・イメージともいえる集合的な心証である。これほど現象的に、かつ帰納的に都市を見る目を、当時ようやくその用語が生まれたばかりだった「都市デザイン」にたずさわるものが持

ち得たという点に驚かされる。

そこから、わかりやすく、アイデンティティを持った空間——著者のいういわゆる「イメージアビリティ」の高い空間こそが望ましいという信念が生まれ、バス、エッジ、ディストリクト、ノード、ランドマークという有名な5つの都市のエレメントが抽出されてくる。

今日、都市計画を学ぶものにとって、本書第3章に詳細に示されている5つの都市のイメージのエレメントはすでに血肉化しており、本書に見られるような慎重なものの言い方はむしろやや奇異にすら感じる。しかし、当時こうした概念を初めて世に送り出す際に、リンチがいかに現場での情報を大切にし、帰納的に結論を導いていったかを振り返ると、新しい概念を生み出すことの大変さが今更ながらよくわかる。

* * *

ただし、今日の視点で振り返ると、私たちはこれら5つのエレメントが存在するという事実だけで満足するわけにはいかない。そしてリンチは、すでに50年前の時点で、すでに次のステップへ進むための布石を打っているのだ。

それが本書第4章の都市形態のデザイン論である。

たとえば都市の形態の特質として、10の手がかりを挙げている。すなわち、特異性、形態の単純さ、連続性、優越性、接合の明晰さ、方向性、視界、運動を意識させるものであること、時間的な連続、名称と意味の10項目である(本書132-136頁)。さらにこれらを統合する「全体としての感じ」が重要だと述べている(同137-141頁)。

もちろん本書の力点はバスやエッジなどの5つのエレメントを詳述した第3章にあるので、第4章の記述はいささか簡潔にすぎるともいえる。ここには著者の将来展望が控えめに述べられているだけである。じっさいリンチはその後、*A Theory of Good City Form*(三村翰弘訳『居住環境の計画 すぐれた都市形態の理論』彰国社)という著書を1981年に上梓し、ここで問題意識を都市の形態一般に拡げて考察

するに至っている。この流れは重要である。ここにリンチが『都市のイメージ』以降に構想したことが実っているからだ。しかし残念なことに、この著書は『都市のイメージ』ほどには一般に知られていないようである。

現在、私たちは『都市のイメージ』第4章で素描された望ましい都市を作り上げるための実際的な技術を磨いていかなければならない。ただし、それは砂上の力仕事ではない。本書第3章でリンチが行ったような手堅い現場での積み重ねのうえに確実な事実を築きあげていかなければならぬのである。本書第3章は、そうした姿勢を学ぶためにも大切な章であり、まだ十分に現代的な意義がある。

留意しなければならないのは、本書がけっして専門家によるものづくりの世界で完結しているものではない点である。都市には主役としての住民がいる。住民なくして都市づくりはできないのである。日本的にいうならば、こんなにちの「まちづくり」をも予感させるスタンスをリンチは提起しているのである。本書第4章は次のような言葉で始まっている;

「われわれには、イメージアブルな——見てわかりやすく、首尾一貫し、明晰な——景観を持つ新しい都市世界を形づくる機会が与えられている。それは都市の住民の側の新しい心構えを必要としている。」

(114頁)

* * *

都市を意味から切り離し、形態的なアイデンティティと構造から読み解こうという画期的な試みは、しかしながら、世界で初めてというわけではなかった。本書の解説の中で富田玲子氏が正しく指摘しているように、直近の先達としてカミロ・ジッテの『芸術的原理に基づく都市計画』(原題 *Der Städtebau nach seinen Künstlerischen Grundsätzen*, 1889年、大石敏雄訳『広場の造形』1983年、鹿島出版会)がある。中世以来の有機的形態とヒューマンスケールの都市空間を賞揚したジッテの著書は反オースマンの旋風をひろく欧米世界に巻き起こ

した。約60年後のリンチの著書は、それとは別の形で、権力とは異なる都市の見方があることをひろく世界中に知らしめたのである。

『都市のイメージ』での主張は、判断の基準が大勢の都市居住者の側にあるという点、形態には気候や時間、記憶などの要素が付与されるので、形態を議論するということは単に物理的な空間構成を論じることに止まらないという点で、ジッテの思想とは異なる新しさがある。

では、リンチ以降では、どうだろうか。世界的な影響力を持ったという点ではC.アレグザンダーの著書『バタン・ランゲージ』(1977年、平田翰那訳、1984年、鹿島出版会)をあげることができる。同書は空間のつくりかたの規範として253の作法を帰納的に抽出しているが、誰もが心地よく感じる空間の質という価値判断を基本としている点で、リンチの思想と本質的に異なっている。

景観法のもとでの景観計画が全国各地で立案されるようになってきた今日の日本にあって、リンチが構想した5つのエレメントの工夫によってイメージアビリティの高い都市へと磨きをかけていくこうという動きは、アレグザンダーの提唱したバタン・ランゲージの規範と並んで、普遍的な課題としてとらえられるようになっている。

次なる課題は、おそらくは、リンチが『都市のイメージ』ではあえて触れなかった都市空間の「意味」の世界を正面に見据えることではないだろうか。

リンチが都市空間の「意味」の世界を避けざるを得なかつたのは1950年代のアメリカの現実に起因しているともいえる。都市の社会的な意味づけが階層によって異なつており、公約数的な集約はほとんど不可能だったに違いない。

しかし、歴史や文化に支えられた意味世界を抜きに都市空間を統合することは本来的にはあり得ない。初版刊行からおよそ半世紀を経て、都市を空間の現象として見据える『都市のイメージ』の果たしてきた役割を心に刻みつつ、私たちは次のステップに進むべきではないか。都市に対する共通の思念が曲がりなりにもあるといえる日本の現実において、そのことは可能だと考える。

まちをくまなく歩き、専門家の目と居住者の目を相互に重ね合わせて都市への正しい距離感を取るというリンチらが考えた手法によって、50年前のリンチの方法論的枠組みの限界を突破することが可能なではないだろうか。本書はそのためのエネルギーを与えてくれる。

巻末に付された翻訳者である富田玲子氏の長文の解説文も、1960年代後半の日本に生まれてこようとしていた都市デザインの新しい動きを体感させる口吻に満ちている。これもそのまま歴史的文書として読みごたえがある。

それにしても本書のそこここにK.リンチの都市に対する限りない興味と愛着が感じられる。たとえば、この本の冒頭は次のようなフレーズで始まっている。

「都市を眺めるということは、それがどんなにありふれた景色であれ、まことに楽しいことである。」(1頁)

これほど素直に都市に対する愛惜を表現した著書も少ないだろう。本書が永い命脈を保ってきた秘密も、都市に対するこうした暖かい気持ちに支えられた細かい観察眼にあるといえる。

同時に、リンチは都市というものが大勢のひとの関与によって長い時間をかけて作られ、変えられていくという事実を忘れない。冒頭の一文に続いて、次のように述べている。

「建築作品と同じ様に都市も空間の構成ではあるが、スケールが非常に大きく、長い時間をかけてようやく感じとられるものである。だから、都市のデザインは時間が生み出す芸術である。」(1頁)

そうした都市の構成員のひとりとして自らの立場をわきまえる謙虚さを著者が保っていたことも、多くの読者が長年にわたって本書を支持してきたひとつの理由である。

(にしむら ゆきお：東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻教授)